

[成果情報名] 諫早湾干拓地における加工・業務用野菜「コールラビ」の生育特性と栽培法

[要約] アブラナ科野菜「コールラビ」の栽培は、キャベツ、ブロッコリー等と同様に機械移植が可能で、短期間の栽培で病害虫の発生は少なく、収量性も高いことから業務用野菜として有望である。7月下旬から8月下旬は種の作型で、窒素成分25kg/10aの施肥条件で球重500gに達するのは、は種後90日(定植後60日)、生育積算温度2000℃前後である。

[キーワード] コールラビ、生育日数、生育積算温度

[担当] 農林技術開発センター・干拓営農研究部門

[連絡先] 電話0957-35-1272

[区分] 総合・営農(干拓)、野菜

[分類] 指導

[背景・ねらい]

諫早湾干拓地における大規模営農では経営安定の方策として、契約等による加工・業務用野菜の生産の重要性が高い。「コールラビ」は、そのほとんどが中国から輸入されており、業務用の煮込み料理などで利用される珍しい野菜である。

加工・業務用野菜の選択品目のひとつとして諫早湾干拓地での生育・収量特性について調査し、栽培適応性を評価する。

[成果の内容・特徴]

1. 7月下旬は種の作型では、は種後約90日、定植後60日で球重500g、球径100mm前後で出荷可能な大きさとなり、3,500kg/10a前後の収量が期待できる。更に、は種後110日、定植後80日まで生育を進めると、球重は1,000gを越え、6,700kg/10a前後の収量が期待できる。(表1、表2)

病害虫の発生は少なく、収穫も容易で、バレイショと同等の栽植株数、栽培期間で収量性は遙かに高い。

2. 播種後の日数または生育積算温度と球重の間には高い相関が認められる。

球重を目的変数(y)、は種後の生育日数を説明変数(x)とする関係式は、

$y = 0.1863x^2 - 11.282x - 0.6875$ で示され、収穫開始の目標球重を500g以上としたときの到達点は、は種後90日となる。(図1)

同様には種後の生育積算温度を説明変数(x)とする関係式は、

$y = 0.0004x^2 - 0.5521x - 0.1134$ で示され、球重500gの到達点は2,004℃となる。

(図2)

[成果の活用面、留意点]

1. 栽培の条件は、耕種概要のとおりである。
育苗は128穴セルトレイによる。
2. アブラナ科連作で、根こぶ病の発生が懸念される圃場での作付けは避ける。
3. 今後の業務用野菜としての販路確保と需要拡大をはかり、新規導入をはかる。

[具体的データ]

表1 コールラビの生育及び収量

播種	定植	調査日	播種後 日数 (日)	播種後 積算温度 (°C)	全重 (g)	球重 (g)	10a収量 (kg/10a)
		10/9	71	1,816	266 ±49.8	163 ±36.5	
7/31	9/1	10/29	91	2,170	701 ±59.6	530 ±49.5	3,534
		11/18	111	2,469	1,155 ±156.0	1,011 ±157.5	6,739
8/14	9/14	10/29	77	1,791	384 ±64.0	264 ±53.8	
		11/18	97	2,091	878 ±119.7	736 ±109.5	4,906
8/30	10/5	11/18	81	1,641	336 ±35.1	194 ±30.1	

表2 コールラビの生育(形状、葉数)

播種	定植	調査日	球径 (mm)	球高 (mm)	葉数 (枚)
		10/9	72.6 ±6.3	58.7 ±4.9	
7/31	9/1	10/29	108.7 ±3.9	81.4 ±3.7	16.8 ±2.0
		11/18	109.8 ±12.9	129.1 ±7.4	21.6 ±2.8
8/14	9/14	10/29	84.7 ±6.6	60.8 ±4.9	15.2 ±1.3
		11/18	99.0 ±6.9	118.5 ±6.1	19.0 ±2.2
8/30	10/5	11/18	58.6 ±3.3	79.1 ±4.4	14.4 ±1.2

[耕種概要]

品種：グランドデューク
 栽植距離
 畦巾120cm×株間20cm
 2条植え 6,666株/10a
 施肥量
 N-25kg/10a
 (硫安47.6kg/10a)

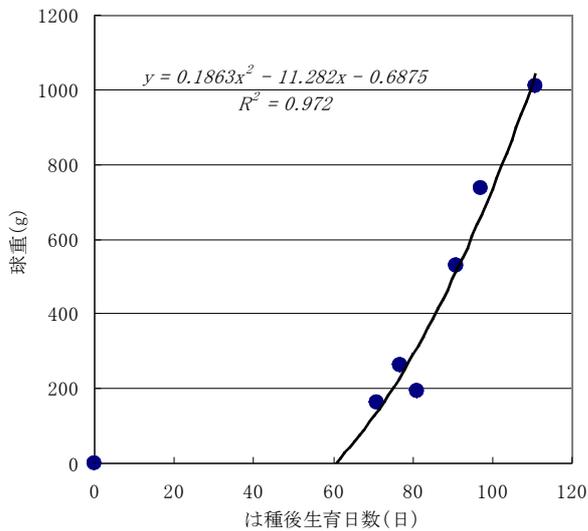


図1 は種後の生育日数と球重

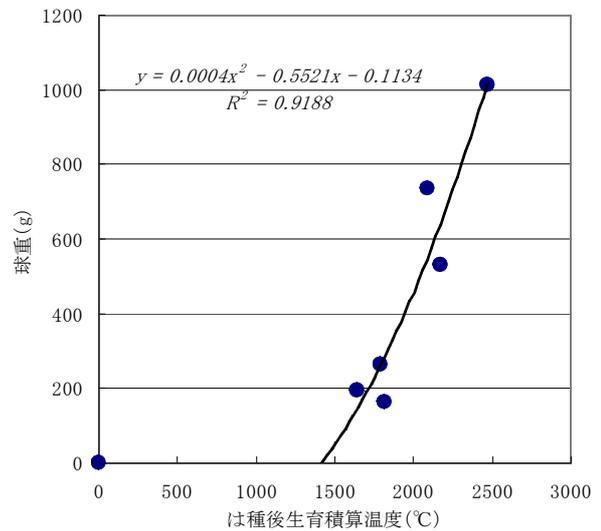


図2 は種後の生育積算温度と球重



写真1(左)
 出荷形態と
 大きさ
 写真2(右)
 球内部の状況

[その他]

研究課題名：Ⅱ．諫早湾干拓農産物のブランド化に向けた栽培技術確立

①加工・業務用需要に対応した栽培法の確立

予算区分：県単

研究期間：2008～2010年度 研究担当者：小林雅昭 発表論文等：なし